

湯あがりの髪のはつれもかきあくる肱にかゝる春の淡雪  
故郷の近き山なみうちくもり小雪亂れて降り出てにけり  
うつゝなの君かみ影のうつりきて思ひ悲しき春の宵かな  
君きかは涙やすらん伊勢の海のこの波の音こゆるぎの音  
春草のやゝ萌えそめし伊勢の野にわれ旅人と成て來りぬ  
赤き石白き貝なととりあつめさため占なふ佗しき日かな  
いはて只あるも宜しや春の夜の花と添寢の夢のよければ  
此の日頃人に知られぬかこととしてわか恥しき星の宵かな  
るり色に光れる星はわか母の瞳のことしなつかしきかな  
わか歌ふ聲ひろごりて夕暗の深きを木曾のたにゝ流れぬ

谷

L.

F.

百合の香に木曾の峽の夜はあけて谷川傳ひ靄の流るゝ  
をもしろく小雨にかすむ峽の宿思ひにこもる人の在すと  
此世をは谷に窮まる道のこと思ひて一人もたへをそする  
夕暮の山越えゆけはしらしらと谷間に花の見ゆる淋しさ  
緑葉の風にゆらけはほのかにも銀ひとすちを流す谷川  
ふちの花しつかに散りぬ故郷の谷の姫百合匂ふらんかも  
葉隠れにすゝしの衣のおとなしう谷に百合咲く水無月の日よ  
大いなる懷にしも入れること谷間の道はこころやすかり  
青葉若葉彼谷蔽ふ日となりぬおほつかなけに鳩も鳴らん  
ほの白う麓の谷のけふれるもかなしや夕たにを越ゆれば  
底知らぬ谷にのそみて立てることひと日は心嚴かにあれ